互いに支え合う その「心」が人を救う

人々の心を動かし始めた映画「ひとりじゃない」。その制作を発案したのが、豊里地区の集落支援員を務める川谷清一（きよかず）さんです。作品には、川谷さんが自ら体験した思いと願いが込められていました。

豊里コミュニティ推進協議会
集落支援員
川谷 清一（きよかず）さん(62)

自分が経験した悲しい思い それが映画制作のきっかけ

大阪市出身で東日本大震災をきっかけに登米市へ移住した川谷さんは「映画を作ろうと思ったきっかけは、自分のおばを孤独死で亡くしたことです。亡くなってから2週間後に発見され、親族でも顔を見ることができないような状況でした。そして、石巻市の復興住宅でも孤独死に立ち会い、悲しい思いをしました。こんなことが少しでもなくなってほしかったので、孤独死を防止する映画を作って呼び掛けたいという思いがずっと心にありました」と映画に込めた思いを話します。

「現代の社会背景から、独りを望む人が多いのは事実ですが、孤独死は本人だけの問題ではありません。残される家族や親戚のことこそ一番に考えてほしい。映画は完成しましたが、本当のスタートはこれから。この映画を多くの人に見てもらい、これからのことを考え、行動するきっかけになってほしいと考えています」と願いを込めます。

本プロジェクトでは、映画制作と併せて、緊急連絡先を記入して冷蔵庫などの家の目立つところに保管しておく「もしものときのあんしんカード」を作成。近所の人などが異変に気が付いたときに、家族や親戚に少しでも早く連絡できるようにと、豊里地域の全戸に配布しました。

タイトルに込めた「心」

映画のタイトルは、川谷さんが考え、自らが筆を執りました。そこには、ある思いが込められています。「タイトルには『心』という字が隠されています。重要なことは、地域の人たちが互いに支え合う関係を作ること。支え合う『心』があれば、孤立する人を救うことができるはずです」と訴えます。

孤立しないためには、人と交流することが大切。市内の各公民館では、子どもから高齢者まで楽しみながら交流できる、さまざまな活動をしています。「今まで公民館に行ったことがないという人でも気軽に利用することができます。そうした活動に参加し、交流することで、新たな出会いと趣味が生まれ、生きがいにもつながります」と参加を呼び掛けます。

プロジェクトの一環で配布した「もしものときのあんしんカード」（右）。デザインは8種類あり、豊里小・中学校の児童・生徒から募集した。市が発行したエンディングノートも一部の世帯に配布

1 豊里公民館の交流事業「カフェサロン」。敬老会で訪れ、音楽体操の後にドーナツとコーヒーを味わい会話も弾む 2 3 歌声喫茶では、歌や演奏を楽しみ、音楽を通じて交流

写真提供：豊里コミュニティ推進協議会

交流から生まれる絆――絆から生まれる支え合いの心

「独りでも生きていける」。特に若い人は「近所付き合いは面倒だ」「独りのほうが気楽でいい」という人も多いかもしれませんが、川谷さんの言うように、本人だけの問題ではないということをもう一度考えてみてください。

孤立や孤独死は高齢者だけではなく、若い人にも起こり得ます。現代の社会構造上、単身世帯になることは避けられない場合もありますが、異変に気付いてもらいやすい関係を、今から構築することが重要です。インタビューした伊達さんのように、まずはできることから始めてみようという前向きな気持ちを持つことが第一歩です。

元気なうちは独りでもいいかもしれませんが、生きがいを失ったとき、近くに信頼して話せる人がいるだけで救われることもあるのではないでしょうか。交流を始めるのに「遅すぎる」ということはありません。交流からは絆が、そして支え合う心が生まれます。あなたが落ち込んで不安を感じたときに助けを求めれば、手を差し伸べてくれる人がきっといるはずです。支え合う心があれば、あなたはひとりじゃないのですから―。